

網膜症との闘い④

岐阜県中津川市の小栗陽三さん(59)は5年前の夏、糖尿病性網膜症で突然右目の視野が狭まり、03年、東京女子医科大学(東京都新宿区)で両目の手術を受けた。その後も症状は安定せず、左目の網膜の血管が詰まったり、緑内障になったりしたが、定期的な診察で早めに見つかり、失明の危機を避けられた。

「出血は少なくなったね。」

新生血管も出てない」

今年のゴールデンウィーク明け。初夏の日差しの中、東京女子医科大学を訪れた小栗さんは、堀貞夫教授の言葉にうなずいた。

05年2月、昨年9月と左目の再手術をして、ようやく両目とも落ち着いてきた。診察は6週間に1度になった。

糖尿病のかかりつけの北田内科クリニック(岐阜県岐南町)にも2週間に1度通う。

「おお、流れとる。やっぱり数字だけより、この方がいいね」。血液の流れを映像で表示する機械を北田雅久院長

危機越え血糖値管理前向きに

とのぞき込みながら、小栗さんは言った。血糖値を下げる薬のほか、血縁をできにくくする薬も飲んでいる。

糖尿病とわかって30年近く。だが、きちんと治療に取り組むようになったのは、目に異変が起きてからだだった。合併症についての知識も本で読んで知っていたが、視力がよかったころは、北欧住宅の輸入販売の仕事に夢中だったのと、手術への恐怖感とで、勧められても治療を受けずにいた。血糖管理もおさざりだった。

網膜症の怖さは、自覚症状がないため知らず知らずに進行し、視力の低下や視野の異常などが現れたときには手遅れになっていることが多いことだ。小栗さんのケースも「今ごろは失明しとってもおおかしくない状況だった」と主治医の北田さんは振り返る。すぐに専門の治療が受けられた小栗さんは「運がよかった」とつくづく思う。血糖管理の大切さも身にしてみた。

それでも、大好きなまんじゅうやケーキを店頭で見かけると、手が伸びそうになる。メガネをかけて砂糖やカロリーの表示を確かめる。視力を失わないための闘いは、甘い物の誘惑との闘いでもある。今も左目にむくみがあり、直線がS字に見えてしまう。「でも、図面は両目で見るから、大丈夫」

大好きな仕事を続けるために、視力を維持する努力を続けたと思っている。



モニターを見ながら北田雅久医師(左)の説明を受ける小栗陽三さん＝岐阜県岐南町で、加藤丈朗撮影